

切腹的美學

徐 翔 生

國立政治大學日文系講師

(收稿日期：2000年1月28日；接受刊登日期：2000年5月11日)

摘 要

日本文化的研究，應非僅局限於歌舞伎、浮世繪、相撲、茶道、花道等藝術或藝能方面領域之介紹，亦當對道德、思想、宗教等精神層面做更深入之探討。日本自古以來對死亡即有切腹、殉死及所謂心中的特殊形式表現，這些死亡方法在現今的日本社會雖然並不常見，但在文學作品、戲劇與藝術中卻仍有其極重要之份量，且為探討日本人心靈深處時不可忽視之因素。日本人到底為何要切腹？切腹究竟為何讓日本人感受到有魅力？本文自切腹的起源開始闡述，並以中世代表性之軍記物語「保元物語」、「平家物語」、「義經記」、「太平記」等作品為主，探討其中所表現之切腹的意義以及死的美學，期盼經由此一研究，能對日本人的死生觀有進一步的認識，進而對於日本文化，有更深層之理解。

關鍵語：切腹・「保元物語」・「平家物語」・「義經記」・「太平記」

切腹の美学

日本文化と言え、おそらく多くの人々はまっさきに歌舞伎、華道、茶道などを頭に浮かべるであろう。また日本という国をまず相撲、剣道、浮世絵の国として規定する、という人も少なくないにちがいない。以上挙げたものがたしかに日本を代表する文化の一部であることは言うまでもない。しかしもう少し立ち入って考えてみると、これらはどちらかと言え、日本文化の一環である芸術または芸能に属しているものであって、日本文化そのものとは言いがたいのである。何故ならば、文化というものには芸能、芸術のほか、道德、思想、宗教なども含まれ、より範疇の広いものを指しているとするのが大方の見解だからである。日本文化とはいったいいかなるものであろうか。以上列挙した内容以外には、どのようなものがあるであろうか。日本思想を専攻し、日本文化の授業を担当している私には、つねにこのことを思索し続けている。

経済の繁栄及び文化の交流により、今日では歌舞伎、能、浮世絵などが世界各地で脚光を浴びて、注目を受けてきている。一方、日本には古来から切腹、殉死、心中というような特有の社会現象もある。この三つの死に方は現在の日本において一般的ではないが、文学作品、演劇、芸術などにしばしば登場しているものである。ところで、日本人はいったいどのような時に腹を切るのでしょうか。このような自然とは思われない死に方は、現代日本人の死生観にどんな影響を及ぼしているのでしょうか。このことは日本人ばかりでなく、数多くの外国人にとっても興味深いところにちがいない。

切腹的美學

本論では、医学的、社会学的な立場からのアプローチはせず、哲学、宗教学の理論に触れることもしない。日本の歴史上の代表的かつ有名な文献及び文学作品を取り上げて、その中に現れている切腹を探りながら、その死における意義及び美学をできるだけ掘り下げることにより、日本人の死生観の形成並びにそのあり方を究明していくことにする。この論文が日本人の死生観の解明及び日本文化に対するよりいっそうの認識に少しでも役立つことができれば幸いに思う。

(一)

切腹がいつ、だれをもって起源とするか、いまだに定かではない。日本で切腹に関する記事がもっとも早く文献に出たのは、八世紀の『風土記』の頃である。当時日本各地の風土、風習、伝承などを調査収集するために作られた『風土記』に、現在兵庫県南西部のあたりを中心とする『播磨国風土記』がある。『播磨国風土記』「賀毛郡」の記するところによれば、賀毛郡の川合里というところに、ハラサキと呼ばれる沼があった。これはハラサキという表現が日本歴史上でもっとも早く現れたところだと言われている。¹

「腹辟沼 右 號腹辟者 花浪神之妻 淡海神 為追己夫到於此處 遂
怨瞋 妾以刀辟腹 没於此沼 故 號腹辟沼其沼鮒等 今无五臟」

¹ 以上、千葉徳爾『日本人はなぜ切腹するのか』（東京堂）及びモーリスパンゲ著・竹内信夫訳『自死の日本史』（筑摩書房）を参照。

近江国の花浪の神の妻である淡海の神が夫をたずねてあとを追ひ、川合里の沼までやってきたが、とうとう追いつくことができないために、怨み怒って絶望したあげく、刀をもって腹を辟き、身を沼に投じて果てた。この沼は淡海の神が腹を辟いたということからハラサキ沼と呼ばれ、また切腹した女神の怨みが残っているため、沼に棲む鮒には今でもはらわたがないのである。

以上は切腹を物語る最初の文献である。神話時代をさておいて切腹の起源を探ってみようとするれば、『続古事談』に記されている十世紀の終り頃の藤原保輔が日本の歴史に残る最初の切腹者である。²公卿であった藤原保輔は権門の子弟に勝るとも劣らない成績をあげながら、官吏登用の選にもれた。がっかりした彼は世を拗ね、強盗殺人を業としていた。たまたま輩下のものの密告から検非違使庁の追及を受けていたが、僧侶に身を変えて、袴垂と異名をとった保輔は、従者左大将の隨身忠延というもののもとに来た。しかし、来たところを源頼光とその配下の四天王に囲まれ、どうしても逃げるができなかった。逃げきれないと知った保輔はついに刀を抜いて、腹を刺し切り腸を引き出したが、死ねなかったために検非違使のもとへ連れられ、翌日獄中で絶命した。時に永延二年、九八八年のことである。

以上述べたことは日本歴史に残る最初の切腹に関する記録である。このような激しい形の切腹は当時においてあまり見られなかったが、平安時代の末期から鎌倉時代初期にかけて、特に源平二氏を主流とする武士の合戦を描いた文献に多く現れる。ここでは、当時の戦いを題材にしたいわゆる軍記物語と呼ばれる文学作品を中心に述べ

² 千葉徳爾『日本人はなぜ切腹するのか』を参照。

切腹的美學

たいと思う。まず保元元年（一一五六年）に起こった保元の乱を題材として書かれた『保元物語』から考えてみよう。

『保元物語』では、鳥羽法皇は崇徳上皇と皇位継承をめぐって、ひどく対立していた。後白河天皇が即位すると、上皇の不満はますます高まり、ついに鳥羽法皇の崩御を機に挙兵を決意するに至った。崇徳上皇は源為義為朝父子を招き、後白河天皇を討とうとした。一方、天皇の方は為義のもう一人の子義朝などの軍を主力として、上皇の方を破ろうとした。結局、崇徳側は敗れ、上皇は讃岐に配流され、為義は義朝の手によって斬られた。これがいわゆる保元の乱である。³

為義が斬られたのち、為義の幼い子供達乙若、亀若、鶴若、天王は四人とも捕えられ、船岡山で斬首されることとなった。この四人兄弟が首を刎ねられると、天王の乳母であった内記平太はその死骸を抱きながら、

「今七年間、暫モ離レ進セザリツル物ヲ。今日ヨリ後、誰カハ我膝ニ居サセ給ベキ。誰カハ我頸ヲイダカン。「何カ所知シリテ、我等ニ預ケン」ト被レ仰シアラマシ事モイツカ聞カン。イカナル物ニ具セラレテカ、四手山ヲバヲワスラン。我帰テハ、誰ヲ見カ慰ベキ。タレニ仕テカ有ベシ共覺ヌ物哉」（『保元物語』下「義朝ノ幼少ノ弟悉ク失ハルル事」）

³ 為義と義朝父子がどうして戦うことになったのか、次のような理由がある。「源義賢、為其兄下野守義朝之子、於武蔵国見殺」（『台記』・久寿二年八月二十七日条）、「義賢、去久寿二年八月、於武蔵国大倉館、為鎌倉悪源太義平主被討亡」（『吾妻鏡』・治承四年九月七日条）と書いてあるように、実は保元の乱の前年（久寿二年）八月に、武蔵国の大倉館で、下野守である義朝の長男鎌倉悪源太義平による為義次男義賢の殺害事件が起こった。この事件をきっかけに、為義と義朝父子の間は大きな亀裂を生じさせていた。ところが、作品の上ではこの事件に触れずに、とにかく崇徳院の意向によって、この父子がやむなく敵対する羽目に陥り、一緒に戦うことになったことになっている。

と言ひ残して、ただちに天王のあとを追つて腹を切つた。これを見た残る三人の乳母も續いてその場で腹を切つた。そして乙若と天王に仕えた格勤も一人ずつ自害をして、その座で亡くなつた人は六人もいた。

そして源為朝は保元の乱に敗れたのち、遠く伊豆の大島に流された。島の生活に十年の歳月が流れ、昔の剛勇ぶりを發揮しはじめた為朝は、追放の身でありながら次々と伊豆の島々を従えて、自分の思う存分に支配していった。それを恐れた後白河院は伊豆近くの諸国の軍勢を駆り集め、為朝を討伐するために伊豆の大島目ざして進發した。数多くの兵船が寄せてくるのを望見した為朝は、すでに死の覚悟ができたので、切つて放した一つの矢で先頭の兵船を沈めた後、柱に背を当て立ちながら腹をかき切つた。これは時に嘉応二年、一一七〇年の出来事である。

平家一門の榮華、没落を描く『平家物語』の中には、武士が敗戦などの理由で自分の命を絶とうとすることもよく書かれている。たとえば治承三年(一一七九年)、前関白松の家臣である江太夫判官遠成が平清盛の軍に追われ、おそらく逮捕されるであろう戦いを前に、彼は子の江左衛門尉家成を連れ、東国の方へ落ち下がろうと思つた。しかしどうせ逃れられないものだから、この親子は腹をかき切つて死ぬにまसारことはないと覚悟して、宿所へと引き返した。そして六波羅からすべて武装した平家の軍が三百余騎その宿所へ押し寄せ、関をどつとつゝつた時、江太夫判官は

「是御覽ぜよをのをの。六波羅ではこの様申させ給へ」(卷第三「行隆之沙汰」)

と言ひながら、館に火をかけ、父子ともに腹をかき切り、炎の中で焼け死んだ。これは「平家物語」における最初の切腹の例である。

そして治承四年(一一八〇年)に、宇治の平等院で源頼政が平清盛の軍勢に攻めら

切腹的美學

れ、もはや何の望みもないと分かった時、彼は自分の命を絶とうと思った。そこで彼は従者の渡辺長七唱を呼んで、自分の首を刎ねよと命じた。唱は主人の生き首を討つことを悲しく思い、涙をはらはらと流して、「仕ともおぼえ候はず。御自害候て、其後こそ給はり候はめ」と言ったので、頼政は西に向かい、高らかに南無阿弥陀仏と十遍唱え、

「埋木のはなさく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける」(巻第四「宮御最期」)

これを最後の詞として、太刀の先を腹に突き立て、うつむきざまに貫かれて亡くなった。

以上述べたように、武士の切腹は敗戦となった時、武士が自ら腹を切ることも見られるし、念仏しながら行われることもある。浄土思想の興隆にともなって、切腹する武士が極楽浄土の西に向かい、高らかに念仏しながら死んでいくことはこの時代にもっとも興味深いことと言わねばならないであろう。

『平家物語』とはほぼ同じ時代を描いた『義経記』にも、主人公源義経や義経の家臣である佐藤忠信などの切腹が詳しく描写されている。『平家物語』では、源頼朝は弟の範頼、義経に命じ、従兄弟の義仲を討たせた。義仲が近江の栗津で敗死した後、頼朝は後白河院に近づいた義経を警戒し、彼を追捕するようになった。兄の頼朝に追討された義経が逃れ逃れて吉野に来た時、佐藤忠信は主人の義経を逃すため、火の中で切腹する態をまねて、僧兵どもの目を眩まし、ひそかに京都へ行った。義経と別れ

た忠信はその後、京都で日を送りながら主人の行方を探し求め、陸奥へ行こうと思っていた。

ところが、かやという馴染みの女に密告され、忠信が陸奥へ下ろうとした時、その宿は頼朝の舅すなわち北条時政の軍勢に囲まれた。忠信は自分の命を惜しいとは思わなかったが、同じ死ぬなら義経の館で死のうと決心して走った。やがて追いついた時政の軍勢と激しく戦った結果、次第に傷つき弱ってきた忠信は

「万事を鎮めて剛の者の腹切る様を御覧ぜよ。東国の方にも主に志あり、ひんじ中天にも会ひ、また敵に首を取られじとて、自害せんずる者の為に、これこそ末代の手本よ。」(巻第六 [忠信最期の事])

と捕まえに来た江間小四郎すなわちのちの北条義時に呼びかけ、高らかに念仏を唱えながら、太刀を腹の中に突き立てた。これは文治二年、一一八六年のことである。

忠信が亡くなった後、ますます孤立無援の悲境に陥った義経は再び頼朝の追捕を受けて、奥州の衣川館で頼朝の圧迫に屈した藤原泰衡の軍勢に襲撃された。義経は防戦したが支えきれず、もはや自決の道しかないと覚悟した時、どのようにして死ぬべきかと臣下に尋ねる。従者から忠信が行った切腹を人々が後々までほめていたと言ったら、義経も忠信のような死に方を選び、

「その刀を持ちて、左の乳の下より刀を立てて、刀の先後へつと通れと突立てて、疵の口を三方へ搔破りて、腸散々繰り出だし、刀をば衣の袖にて拭ひつつ、

切腹的美學

膝の下に引敷きて、衣引掛けて脇息にしてぞおはしける。」(巻第八「判官御自害の事」)

と自ら命を絶った。時に義経は年三十一、一一八九年のことである。

以上述べてきたように、十二世紀のなかばから終り頃にかけて、切腹に関する記述が軍記物語に多く見られるようになる。特に敗戦した源氏の武士がよく切腹をすることが多く書かれている。言うまでもなく、文学作品の上では、作者がイメージを築き上げるために、切腹のことが少し誇張的に描かれているかもしれない。しかし以上あげたところから考えてみれば、切腹はたしかに実在の行動として十二世紀末という時代に日本社会に確立された。この行為の確立により、日本の古代だけでなく、その次の中世すなわち鎌倉時代から南北朝時代にかけて、切腹ということがさらに多発するようになった。ここで十四世紀の南北朝時代の代表的な軍記物語『太平記』を中心に、切腹のことを見てみよう。

『太平記』は北条高時の失政、後醍醐天皇の北条氏討伐計画に始まり、建武中興の完成と崩壊、足利尊氏の造反を経て、南北両朝の対立に至る五十数年間の動乱を描くものである。この大部かつ複雑な作品において、南北朝時代の動乱と敗戦にともなう武士の切腹がよりいっそう多く書かれている。また『保元物語』、『平家物語』、『義経記』などには見られなかった、多くの武士が同時に同じ場所で切腹することも大いに描かれている。⁴たとえば後醍醐天皇方の軍勢が六波羅攻めの際の出来事として、『太

⁴ 実は『平家物語』の中では、武士が一所で死のうという考えがよく現れている。たとえば寿永三年(一一八四年)、後白河院と反目した源義仲は源頼朝に攻められ、源義経と戦うことになった。義経の軍勢に追いつかれ、敗戦となった義

平記』卷第九には、北条仲時に率いられた鎌倉方の軍勢がすべて自害することが記されている。

最後の六波羅探題越後守北条仲時は、足利高氏が北条氏に叛旗を翻したため、京都の合戦に破れた。京都から鎌倉へ行く途中、仲時は近江国番場の駅で官軍の兵に囲まれてしまった。少ない軍勢でもはや敵の手を逃れるべくもないことを理解した時、仲時は

「弓矢の名を重んじ、日来のよしを忘れずして、これまで着きまとひたまへる志、なかなか申すにことばは無かるべし。その報謝の思ひ深しといへども、一家の運すでに尽きぬれば、何を以つてかこれを報ずべき。今はわれかたがたのために自害をして、生前の芳恩を死後に報ぜんと存ずるなり。仲時不肖なりといへども、平氏一類の名を揚ぐる身なれば、敵ども定めてわが首を以つて、千戸候にも募りぬらん。」(卷第九「越後守仲時以下自害の事」)

と味方の軍勢に向かって述べながら、鎧をぬいて腹を切った。これを見た部下の糟谷三郎宗秋は涙を流しながら、仲時が柄口まで腹に突き刺している刀を取って切腹し、

仲は乳母子の今井四郎兼平と同じ所で死のうと思ったため、今井のいる勢田の方へ逃げて行った。そして近江栗津の松原で義仲が矢で射殺された時、今井もその場で自害をして死んでしまった。また元暦二年(一一八五年)、壇の浦の合戦で敗れた平知盛は安徳天皇に入水を勧めた後、自らも乳母子の伊賀平内左衛門家長とともに入水した。これを見た武士たち二十余人も手に手を組み、一緒に海に沈んだ。しかし以上あげた例は現世の最後を一所にするという考え方によるものであって、武士たちがその最期の現世の瞬間を契りある者とともにあり、ともに死ぬことを求めたからなのであった。これは『太平記』に見られる武士の集団切腹とはやはり意義が異なる。

切腹的美學

仲時の膝をしっかりと抱いてうつぶした。そうすると、その場にいる武士がわれもわれもとこれに続いて切腹してはて、ついに近江国番場宿の地藏堂で仲時の一族郎党四百三十二人が同時に腹を切り全滅した。

仲時の一族が全員自害してから一か月もたたないうちに、鎌倉がいよいよ陥落することとなり、鎌倉幕府もついに倒れる時となった。北条氏最後の執権北条高時は御殿に火を放ち、幕府の主であった武将たちを東勝寺に集め、お互いに別れの盃をくみかわした。その時諏訪入道直性は盃を取って、心静かに三度傾けて高時の前におき、

「若者ども随分芸を尽して振舞はれ候ふに、年老りなればとていかでか候ふべき。今より後は、皆これを送り肴につかまつるべし。」(巻第十「高時ならびに一門以下東勝寺において自害の事」)

と言いおわると、腹十文字にかき切って、その血のしたたる刀を主君の前に置いた。これを見た高時も一族の二百八十三人の武士もともに腹を切ったり自ら首をはねたりして、その最期を遂げた。火を放たれた建物はもうもうと燃え上がり、黒い煙は天を覆った。これを見た庭上と門前の兵たちはやがて腹を切る者、燃え上がった炎の中へ飛び込む者と、思い思いに自害してはてた。結局この一か所で死んだものは八百七十余人にも及んだ。これは時に元弘三年(一三三三年)、さき述べた仲時の一族が近江の番場で全員切腹を行ってから十五日目のことである。

このように、武士が一緒に切腹することは以上あげたところに限ったものではなく、ときには小人数で行われ、ときには大きな規模で頻繁に行われた。鎌倉時代から

南北朝のこの時期になると、切腹はまさに盛行期に入ったと言ってもよかろう。⁵

(二)

以上は切腹の起源から流行に至るまでのことを述べてきた。では何故武士は切腹しなければならないのであろうか。この死に方がいったいどのようなことを意味しているのか。本節では切腹における死の意義を中心に探ってみたいと思う。これに入る前に、まず前節で述べた切腹について、いくつかの例を取り上げて論じたい。

すでに触れたように、『続古事談』に記述されている平安時代の藤原保輔が日本歴史でもっとも早く現れた切腹者である。言うまでもなく、藤原保輔の切腹はのちに現れた戦場での武士による切腹とは、そもそも次元の異なる話といってもよい。すなわち盗賊としての保輔は、その境遇から向上することに希望を持ちえないため、やがて逮捕の機を迎えようとした時、自分の命を絶つことを決意し、自ら腹に刀を突き立てたのである。このような挙動はあくまでも罪の意識による自己否定的な行為であり、言ってみれば一種の自己損壊としか言えない。それにもかかわらず、このような自己損壊に結びついた切腹の事例は、平安末期から鎌倉時代にかけて、軍記物語の中にしばしば登場している。ここで軍記物語に現れる切腹の場面を取り上げながら、切腹の意義についてあらためて考察してみよう。

前節でも述べたように、『義経記』では、源義経の家臣佐藤忠信は鎌倉側の軍勢に

⁵ 『死の日本文学史』において、作者松村剛は『太平記』の切腹について、次のように述べている。『太平記』の切腹の記述は北条高時滅亡のさいの鎌倉の二百八十三人、京都六波羅の三百四人の凄惨な自決をはじめとして六十八件、二千四百十人を超えるのである。それに名前も人数も明記されていない郎党がさらにこれに加わるから、『太平記』はほとんど切腹の記録と言ってもいいであろう。

切腹的美學

囲まれ、もはや自決の道しかないと覚悟した時、忠信は「万事を鎮めて剛の者の腹切る様を御覽ぜよ。東国の方にも主に志あり、ひんじ中天にも会ひ、また敵に首を取られじとて、自害せんずる者の為に、これこそ末代の手本よ。」(巻第六〔忠信最期の事])と言いながら、太刀を腹の中に突き入れた。これと同じような場面は『平家物語』の中にも見受けられる。たとえば前関白松の家臣江太夫判官遠成が平家の軍に追われ、逮捕されそうな寸前に、切腹するよりほかならぬと覚悟した彼は「是御覽ぜよをのをの。六波羅ではこの様申させ給へ」と述べながら、父子ともにその場で腹をかき切った。

ここで注意すべきことは、何故佐藤忠信と大江遠成は自害する前に、その切腹が「剛の者の自害する手本」となる、「是御覽ぜよをのをの。六波羅ではこの様申させ給へ」、というようなことを言ったのであろうか。これと類似した表現はむろん以上にあげたところに限るものではなく、ほかの軍記物語にもよく現れる。とにかく武士が切腹する場合に当たると、こういうような言い方がすぐ出てきて、結局切腹は武士の決まった自害方法となり、作品の中でほぼ法式化して次々と廻されていくのである。それでは何故武士は切腹しなければならないのか。切腹して手本となるとはいったい何を意味しているのか。またこのような思想はどのようにして形成され発達してきたのか。以下ではこれらに焦点を絞って考えたいと思う。

武士のこのような思想がいかに形成され、いかに発達してきたのか、その歴史的な説明を明らかにするのは容易ではないが、とりあえず武士の起こりを探りながら、その思想の形成並びに変遷について述べてみたい。

武士の発生についてはいまだに不明なところが多いが、日本では、武士と

という言葉がもっとも早く現れたのは奈良時代の『続日本紀』の頃である。「文人・武士、国家所重」（『続日本紀』養老五年（七二一年）正月二十七日条）とあるように、武士は文人に対する武人であり、武力にかかわる役人としての意味で用いられている。一方、ほぼ同じ頃に出来た日本最古の歌集『万葉集』にも、武士は「もののふ」と見え、「もののふの八十伴の雄をまつろへのむけのまにまに老人も女童児も其が願う」（巻第十八）とあるように、武力を以って朝廷に仕える人の意である。このように、もとより単に武人、兵士のことを指していた武士はその呼び名がその後防人、衛士となり、さらに健児、檢非違使などを経て、ついに武芸を職能とする武士が現れてきて、武士と呼ばれるようになったのである。⁶

十世紀末頃の平安時代中期に、武士は「武芸」という芸能に従事するものとして現れてきた。東国の山野で馬に騎乗し弓射に秀でるといふ武芸の術を磨いた武士は、一方では国衛の「兵」となり、一方では都へ上り、貴族の「侍」となっていた。十一世紀の中頃には、「兵の家」、「武者の家」と称される武士の家が確立していて、武士はさらに騎射弓兵の修練を中心に、武芸の術及び戦技能力の維持発展に努めた。このように、草深い田舎とされた東国に成長してきた武士は次第に武士団を形成し、いわゆる「坂東八平氏」をはじめ、日本全国的に活躍していった。そして東国での騎射弓兵の修練の中から「坂東武者ノ習」、「もののふの道」、「兵の習」といった武士の倫理が生み出されて、それが武士道の基礎を成すのである。

⁶ 以上、下村効編『武士』（東京社）、参照。

切腹的美學

十二世紀後半の平安末期から鎌倉初期にかけて、源平二氏の戦乱が絶えず起されていた。東国で成立した武士団はさらに武家の棟梁としての源平両氏の合戦に参加した。合戦で活躍した武士は、戦場で敵軍と接触する時、自分の武芸、英勇を表すために、いつも最後まで敵と戦わなければならない。敵と奮戦する間に、死を恐れぬことが次第に養成されてきて、ついに死を軽んずるようになった。このように、もとより騎射弓兵の修練を中心にした「坂東武者ノ習」、「もののふの道」、「兵の習」といった武士の道徳が徐々に変容し、死を恐れず、死を軽んずるという武士の独特の死生観を発展させるに至ったのである。

しかし当時の武士が死を恐れず、死を軽んずることには、その基底に武士としての名を惜しむということがあり、そのような考えは単に武士と主君との主従関係の間のみ存在していた。すなわち武士が戦場で死を軽んずることは、主君への献身という倫理的、道徳的なものではなく、自分の家名を墜さないために、死を恐れず、怯懦を憎むのである。では武士は何故その名を重んずるために、大事な命までも捨て惜しまなかったのであろうか。これは当時の時代背景並びに武士に課された役割と大いに関連するものと考えられる。

周知のように、鎌倉時代の確立とともに、武士と主君との間にいわゆる主従関係が結ばれるようになった。主従関係のもとで、武士は主君から与えられた「御恩」によって生活を維持しているが、その見返りとして、主君に対して「奉公」の義務を負っている。主従関係ではこうした御恩と奉公が交換的に成り立っているために、鎌倉武士の死生観も当然このような関係を基礎として形成された。すなわち、主君から与えられた領地が子供に継承される上で、自分の受領した恩賞も子孫まで継ぐことができ

ることから、主従の関係は年を経てもずっと存続していく。結局、子孫の繁栄のために、戦場に身を捨てた武士は日増しに増えていった。

主従関係は御恩と奉公との経済的關係から成り立っているため、その根底には恩賞を望み、子孫の繁栄を期待する一方、長期にわたって主君に随伴していくうちに、主従間の上下関係が次第に変質し、情愛に変貌しながら、やがて相互の情誼がますます深くなっていく。それと同時に、主従関係も経済的な交換関係から情的な結びつきとなり、結局そもそも「恩賞のため」から始まった觀念も次第に影を薄めて、武士は情愛の上から主君のために身も心も捧げるようになり、こうして主君に献身的な道徳が徐々に形成されていったのである。

事実上、武士が主君のために身も心も捨てることを惜しまないという行為の根底には、御恩または情誼を超えるもっと肝心なものが存在している。それはほかならぬ名を重んずるという觀念である。ここでいう「名」というのは、「朽もせぬ、むなしき名のみとどめをきて、かばねは越路の末の塵となるこそかなしけれ」(『平家物語』巻第七「真盛」)のように、「むなしき名」を意味していることもあれば、「弓矢取身は我も人も死の後の名こそ惜けれ」(『源平盛衰記』)という「死後の名」もある。また名の客体的な表現としての恩賞または官位を得ようとする、現世的な繁栄という意味の名もある。主従関係は経済的な交換から成り立っているため、名の追求は現世的に経済的な繁栄の追求に還元されるものかもしれない。⁷

ところが、すべての武士がこのような功利的な意識で生きていたのではない。名を

⁷ 以上、相良亨「武士と死」(『日本における生と死の思想』、有斐閣選書、所収)及び「武士の思想」に関する同氏の研究(『相良亨著作集3』ペリカン社)などを参考にした。

切腹的美學

追求する武士は現世的に経済的な繁栄を求めようとすると同時に、「むなしき名」、「死後の名」といった「朽もせぬ」名も得ようと望んでいた。このような朽もせぬ名を重んずるが故に、武士は戦場において死を恐れぬほど一生懸命に戦うのである。また当時において、家といい、家名という観念がすでに定着しており、家名を揚げること、あるいは家名を辱かしめないことという思想がすでに養われていた。家名を揚げるために、武士は戦場で全力を尽くして最後まで奮戦するが、勝つ見込みがなくなり敗戦となった時、家名を辱かしめないために、武士はその場で腹を切って自分から進んで死地に赴くのである。このように自己を犠牲にしても、家名に傷を付けないことは、主君に対して武士の報ずる所以である。

南北朝から室町時代にかけて、名を重んじて家名を守るために、死を恐れぬ武士がますます増えてきた。これに関しては、当時の動乱を語る『太平記』にも記述されている。「千騎が一騎に成るまでも、敵を亡ぼして名を後代に残すこそ、勇士の本意とするところなれ」（巻第十「大仏貞直ならびに金沢貞将討死の事」）という陸奥守貞直の言葉に示されているように、武士はその名を後代に残すために、最後の最後まで勇ましく戦うべきものであった。そして勝つ見込みも生き返る見込みもなくなり、将来が絶望的になった時、名を惜しむ武士の一族郎党が直ちに自害することがしばしば見受けられる。すでに触れた北条仲時の一族四百三十二人の近江の番場での全員自害、そして鎌倉幕府が滅びた時、北条高時に率いられた二百八十余りの武士が同時に東勝寺で自害を決行したこと、これらのことはすべてこの時代の武士がいかに名を重んじ、家名を惜しむことを説明しているであろう。

この名を重んずる故に、武士は戦場で合戦する前にいつも大声で名乗りを上げるの

である。たとえ勝目のない戦いであっても、武士はやはり高声に名乗りを上げてから勝負を挑む。場合によっては、仕来り通り氏族の系統を述べたて、累代の先祖の名まで上げることもある。

「日來は音にも聞きつらん、今は目にも見たまへ。木曾殿の御めのと子、今井の四郎兼平、生年卅三にまかりなる。さるものありとは鎌倉殿までもしろしめされたるらんぞ。兼平討ッて見参にいれよ。」(『平家物語』卷第九「木曾最期」)。

「清和天皇に十代の御末、八幡殿には四代の孫、鎌倉殿の御弟、九郎大夫判官の御内に、十郎権頭兼房、元は久我大臣殿の侍、今は源氏の郎等、樊噲を欺く程の剛の者、いざ、手並みの程をみせん」(『義経記』卷第八「兼房が最期の事」)

「今某十七代の末孫に、斎藤伊予房玄基と言ふ者なり。今日の合戦、敵御方の安否なれば、命を何のために惜しむべき。死に残る人あらば、わが忠戦を語つて子孫に留むべし。」(『太平記』卷第九「六波羅攻めの事」)

とあるように、その名を呼び上げることにより、自己の行為が家名または祖先の名に恥じないことを示していると同時に、名を後代の子孫に残すために、命を惜しまぬと言明している。このような記述が軍記物語に数多く登場し、類似した事例は枚挙にいとまがない。

(三)

以上は武士の起りから鎌倉時代、南北朝時代における武士の死生観の形成背景を

切腹的美學

中心に述べてきた。その時代の代表的な軍記物語における切腹のことからうかがわれるように、中世の武士は名を追求するために、戦場で敗戦となった時、自ら切腹をすることにより、自分の勇猛さを表すとともに、武士としての名を保とうとする。そして時代背景が平和な近世になると、武士はまた切腹という手段を用いて、主君に忠を尽くそうとすると同時に、あの世まで主君の供としてあとを追う。以上のように、切腹という行為は日本では十二世紀末の中世から十七世紀の近世にかけて、武士階級の間広く普及していた。

一見したところ、切腹はとても簡単かつ明快な死に方のように思われる。自らすばやく腹に刀を突き立てるこの切腹の動作に、何ともいえない勇猛、荘厳そして神聖な感じがあるように思われる。このような簡単でしかも勇敢な動作で、一瞬のうちに一人の人間の命を絶つことができることから、切腹はきわめて効率的な死に方とも言えよう。ところが、実際のところ、切腹はわれわれの想像以上の苦痛を感ずる上に、腹に刀を入れるだけではすぐ死のうと望んでいても、そう簡単には死なない。これに関して、まず前節で述べた切腹の事例をもう一度見てみよう。

すでに述べたように、『播磨風土記』に記述されている淡海の神の切腹は日本文献の上ではじめて見られた切腹の例である。ここで注意すべきことは、「以刀辟腹 没於此沼」とあるように、淡海の神は腹を辟いてから沼に没り、つまり腹を切ってから死んだのではなく、沼に飛び込んでやっとな死をとげたのである。また『続古事談』に記されている藤原保輔の切腹は刀を抜いて腹を差し切り腸を引き出したが、それでも死ねずに、検非違使のもとへ連れられ、翌日獄中で亡くなった。

戦いを主題とした軍記物語になると、切腹についての描写がよりいっそう明らかに

書かれている。前に言ったが、『義経記』の中では、主人公の源義経と義経の臣である佐藤忠信は二人とも自害をした。ここで少し原文を引きながら忠信の切腹の場면을説明しよう。

「(忠信) 大の刀を抜きて、引合をふつと押切りて、膝をつい立て、居丈高になりて、刀を取直し、左の脇の下にづばと刺し貫きて、右の方の脇の下へするりと引廻し、心先に貫きて、臍の下まで搔落して、刀押拭ひて打見て、(中略) 疵の口を包みて引きあげ、拳を握りて腹の中に差入れて、腸縁の上に散々に掴み落として(中略)、抜いて置きたる太刀を取りて、先を口にいれて、膝を押へて立上りて、手を放ちて俯伏にがばと倒れけり。鏝は口に留まりて、切先鬢の髪を分けて、後にするりとぞ通りける。」(卷第六「忠信最期の事」)

忠信は「刀を取直し、左の脇の下にづばと刺し貫きて、右の方の脇の下へするりと引廻し、心先に貫きて、臍の下まで搔落して、刀押拭ひて」腹を切ったが、すぐ死なないので、再び「疵の口を包みて引きあげ、拳を握りて腹の中に差入れて、腸縁の上に散々に掴み落として」とはらわたを繰り出し投げ散らした。それでも死を遂げないために、結局忠信は「太刀を取りて、先を口にいれて、膝を押へて立上りて、手を放ちて俯伏にがばと倒れけり」と刀を口にくわえてうつぶし、ようやく死の目的を遂げたというのである。

以上あげたところから分るように、切腹は決して簡潔かつ明快な死に方とは言えない。それと同時に、切腹の際、単に腹に刀を入れるだけでは、死ぬことはなかなかで

切腹的美學

きないという事実も明らかである。

そういう意味で、切腹が簡潔かつ明快な死に方でないということは、その遂行または決意に、かなりの勇気、冷静及び意志力が要求されることになる。つまり勇気、冷静及び意志力という客観的な要素のいずれを欠いては、切腹ということを実行するのは無理であろう。言い換えれば、切腹はよほどの覚悟ができていないかぎり、なかなか成功に至らないのである。そのために、江戸時代に入ってから、武士に対する刑罰としての切腹、また殉死に用いられた切腹は次第に制度化され、その礼儀作法から介錯までを明文化し、一つの儀式として定着した。結局、介錯は切腹が礼儀正しくとり行われるという立会いの役割から、切腹者が腹を切ったら、後ろからその首をはねて、切腹者の苦痛を軽減させる、という働きに変わってしまったのである。

もとより戦場で自害しようとする武士には、刀を口に加えて咽を刺し徹すといったような方法もあり、自害の法は切腹には限らない。ただいま述べたように、腹を切ることによって命をなくすために、もっとも迂遠でもっとも苦痛を感じずる方法であるにちがいない。そこで何故武士はあえてこのようなもっとも苦痛のある切腹死を選んだのであろうか。また体の特定の部位を選んで切るのには何か特別な故があるのか。要するに腹に特定してそこに刀を突き立てるのはいったい何を意味しているのか。ここで近代思想家新渡戸稲造の論述を借りながら、その意味を考えてみよう。

新渡戸氏はその名著『武士道』において、切腹のことを次のように述べている。

「とくに身体はこの部分を選んで切るは、これを以て靈魂と愛情との宿るところと

なす古き解剖学的信念に基づくのである。」⁸

すなわち、腹部には靈魂と愛情が宿っているとの信仰が日本人の間に存在していた今日われわれはよく頭や心臓を体でもっとも樞要な機關だと考えているが、これわ勿論人間の腹部に靈魂が宿るといふ信仰に比べれば、その概念自体に異なる部分がある。もっとも人間の魂が腹のどこかに宿るといふ考えは必ずしも古代民族に限るとは言いえない。新渡戸稻造の説によれば日本人は昔から現代に至るまでこのような考えを深く信じている。そのために、日本人は自分の名譽を保とうとした時、自ら腹を切って、「我はれが靈魂の座を開いて君にその 態を見よう。 れているか清いか君自らこれを見よ」⁹、と相手に自分の清き靈魂を見せて、自分の潔白を証明することより、自分の名譽を保つことが出来る。

外国人の立場から見れば、切腹というのは人によっては考えただけで身震いするような行為で、このような行為はどう見ても一種の自虐行為としか受止めようがない。何故なら、切腹というのは少なくとも自らの手で自らの腹を実際に切るといふ形を取ったもので、自分が意識的に血の中で自分の死を体験し、自分の目で死を見つめることであるから、これはきわめて残酷あるいは残虐なことと言わねばならない。これに対して、日本人は腹を切るのがもっとも勇ましい行為だと考え、この残酷な自虐行為を通じて、自分の信念と意志を表明すると同時に、自分の名譽をも確保することができた。したがって日本人にとっては、切腹は単に表面上の自害といふことのみに止まらず、自分の精神と意志の証、いわば一種の崇高な行為であった。

⁸ 新渡戸稻造『武士道』(岩波文庫・一九九一年十一月版)、九八頁

⁹ 同掲書・九九頁。

切腹的美學

それでは、何故このような苦痛が多く、なかなか死の目的を遂行できない死に方が崇高な行為とされるのであろうか。またこの残酷な自虐行為はどのようにして日本では高く評価されているのか。この点について、前節で触れたいくつかの例をもう一度振り返って角度を変えてみてみよう。

さきほど佐藤忠信の切腹についての描写を述べていたが、実は忠信が切腹してから、次のような出来事があったのである。忠信がその切腹を見事に遂げた後、江間小四郎が彼の首を持って鎌倉に帰った。小四郎が忠信の切腹のようす及び最期の時の言葉を語ったところ、源頼朝は大いに感動し、弟義経につき従っている忠信は立派なもので羨ましい、どうして東国にはこれほど立派な武士がいないのかと嘆息した。それを聞いた従者の畠山重忠は言葉をはさんで次のように言った。

「心も及ばず、よくこそ死にて候へ。死にて候へばこそ、君にもかかる御気色にて候へ。生きて取り下され参らせて候はんずるには、判官義経殿の御行方方知らぬことはあらじとて、糺問強くせられ参らせなば、生きてる甲斐も候ふまじ。終には死ぬべき者の、余の侍共に顔を護られんも、心憂かるべし。」(巻第六「忠信が首鎌倉へ下る事」)

つまり忠信が切腹して死に、敵に捕えられなかったから頼朝は誉めているが、もし忠信が生捕りになって引かれて来たならば、厳しく尋問され、大いに辱められるであろうと畠山が批判したのである。畠山のこの話からうかがわれるように、敗戦した武士が生きて帰ってくれば恥を受けるが、戦場で死んだなら逆に崇高な評価を得るとい

うことである。とりわけ、その死が敵に殺されたのではなく、自ら進んで死地に赴いたというのであれば、よりいっそう評価されるのである。その死は敗戦によるものか、それとも実力が弱くて負けたのかということには関係なく、とにかく自ら腹を切って死ねば、人々から肯定され讚美されるのである。

以上述べたことは忠信の事例に限らず、その主人である源義経についても当てはまる。前にも言ったように、義経は兄頼朝の追捕を受けて切腹のやむなきに至った。義経が忠信をまねて切腹した後、追捕の者は義経の首を切り取り、鎌倉にいる頼朝のところまで送り届けた。首の護送は文治五年(一一八九年)の五月末、鎌倉までの行程は一か月以上の日時を要した。その首が途中で腐らないように酒の入った壺に入れられて運ばれたのである。弓矢取る身として希代の名将と言われる源義経は、結局このように哀れな最期を遂げた。¹⁰義経の首は鎌倉に着いてから、さらに町で廻された。その最期を見た人々で感動しないものは一人もいなかった。¹¹

このように、切腹死が人々を感動させ人々に讚美されることは、『義経記』に限ったものではなく、ほかの軍記物語の中にもしばしば見られる。たとえば前節にも触れたように、『保元物語』において、主人公の源為朝は最後切腹をした。実は為朝が腹を掻き切ってから、加藤次景高という武士が長刀を持って為朝の首を打ち落として、

¹⁰ 源義経が切腹したのは一一八九年五月の末、その首級が平泉から鎌倉に着くのに、もう死後一か月半が経ち、あまりに遅いことから、時あたかも夏になった。その首が酒に浸してあったとしても、義経本人かどうか確認できないほど腐爛していたのではないかという疑問もたれる。そこから義経が生脱したという説が出てきた。以上は高橋富『義経伝説』(中公新書)一一七至一一九頁を参照。

¹¹ 鎌倉幕府の事跡を記した史書『吾妻鏡』では、潜行する義経の居所を必死になって追及するが、義経の最期は次のように簡単に書かれている。つまり平泉の家臣新田高原というものが郎従二十騎をつれて義経の首をもたらした。その首は黒漆の櫃に納められ、美酒に浸してあったという。しかし「観る者皆双涙を拭い、両袖を湿す」とあるように、この薄命の英雄のあわれな最期を見た人々は皆ただ涙するよりほかになすすべきもなかったのである。

切腹的美學

その首は京都の天皇のもとに送られ、獄門に高く懸けられた。為朝の首が届いたと聞いた京都の人々は、身分の高下を問わず黒山のように集まってその首を見ようとした。為朝が二十八歳を一期として深く自害してはたしたわけであるから、それを聞いた人々はみな為朝ほど元気に溢れた勇士はかつてなかったと褒め称え、その評判は天下にひびきわたったというのである。

以上は日本文学の上でいわゆる軍記物語の記述から切腹のことを述べてきた。しかしよく考えてみると、軍事物語に記されている切腹は、はたして切腹そのものの実態、または作者の実見したものなのか、多少疑う余地が残っている。何故ならば、戦争の場合、切腹を実見することができたとすれば、それはおそらく敵側の者であろう。敵である以上、その切腹の場面を「剛の者の自害する手本」というように誉めることはあまり考えられない。それを実見したのがもし敵側でなく、味方側であったとすると、「仲時一族が全員切腹」、「高時の一族がすべて自害」とあるように、全員が自害したとすれば、その光景を目撃できた味方側の者も生きてそれを第三者に伝えることはできない。したがって、軍記物語における切腹に関する記述は、作者が実見したというより、実見した者からの伝聞またはほかの記述から作者の想像によるものであろう。

そういう意味で、伝聞に基づいて書かれた軍記物語の描写した切腹は、実際の切腹とはある程度の差異が存在しているはずである。特に文学作品の中には、いわゆる「いつわり」、「うそ」といったようなものが存在しているので、伝聞によって書かれている切腹の描写がはたして現実にあったか否か、その判定は容易ではない。したがって、文学の上では、切腹のことが誇張的に書かれていると多くの学者が指摘してい

る。¹²

しかし合戦というのはただ戦えばよいというものではなく、その戦いのようすは記録され残されなくてならなかった。この記録を作成し生き残った一族に伝える人たちは、一族の近親であり、または下人であったり、あるいはより職業的に合戦のたびにそこに赴いたという念仏聖などであったりする。彼らは戦いに出る武士に最後の念仏を授け死者を供養し、そしてその最後のありさまを家族の残る故郷に報告する。たとえば、『平家物語』において、諏訪の住人茅野太郎光広は、おそらく死ぬであろう戦いを前に弟の七郎を尋ねるところがある。

「子共二人、信乃国に候が、「あッばれ、わが父はようてや死にたるらん、あしうてや死にたるらん」となげかん処に、おととの七郎がまへで打死して、子共にたしかに聞かせんと思ため也。」(巻第九「樋口被討罰」)

と自らの死のありさまを一族に伝え残すためであった。また武蔵国の住人河原太郎は死を覚悟して弟の次郎に、「されば千万が一もいきてかへらん事ありがたし。わ殿は残りとどまって、後の証人にたて」(巻第九「二度之懸」)と言ったが、これに対して次郎は「所々で討たれんより、一所でこそ討死をもせめ」(同巻「二度之懸」)と耳を

¹² 千葉徳爾氏は『たたかひの原像』において、切腹のことを次のように述べている。たとえば『太平記』の場合には、おそらくその場の光景を目に見てきた人たちの口から、死の光景というものが著者にうけとられ、著者が読者や聴衆たちが期望した状況に近く記されたであろうと考えられる。そして中康弘通氏は「切腹の沿革」(『自殺と文化』、至文堂、所収)において、切腹を次のように指摘している。つまり多数の見物人の前で肌をひろげ、腹を断ち切った上内臓をも剔抉していることは、自己加虐の極致でもあり同時に、その自己加虐を誇示してさえいと見える。しかもこの惨烈をきわめる自害の様相を敵側の人人が蕭然と見守って、十分に遂行せしめた上、さらに賛賞した。以上述べたことから考えてみれば、切腹のことはやはり文学の上では誇張的に書かれていると言わねばならない。

切腹的美學

貸さなかったため、最後のありさまは下人によって妻子のもとに伝えられたとある。

このように、戦場における死は一族にそして武士の共同体に見つめられての死であるために、その死にさまの善し悪しが問題であった。その最後のありさまが鮮やかな最期であったら、それが名として家族または一族に伝え続けられる。したがって武士にとっては、死とは単なる個人の無意味な死ではなく、この死において単なる個人は名として共同体に語りつがれ生き続けた。死とは一族からの確実な分離であるにもかかわらず、武士の場合、この死によってかえって己の存在の意味が明確になった。己が朽ちせぬ名としてたしかに実在しうるか否かはその最期のありさまにかかっており、この瞬間に己が子孫へと一族を持続せしめえたかどうか、或いは一族の系譜に記憶されえたかが了解された。¹³ このように考えると、武士が戦場で切腹する前に、「剛の者の自害する手本」などと言ったことも分かる気がする。

以上のように、切腹は軍記物語においては過大化され、誇張的に書かれているのか、それとも死が意識されてその名が鮮やかな最期とともに、一族に伝え続けられるためなのか、その死にさまは立派になった。いずれにせよ、切腹死ということが大いに人々を感動させたのは事実である。人々は切腹死に感動するとともに、その死はさらに人々に肯定され、称賛されていた。ここで問題となるのは、何故切腹死が人々に肯定かつ讚美されるのかという点である。前にも触れたように、外国人の目から見た場合、切腹は残酷な自虐行為そのものにちがいない。ところが、何故日本人は逆にこのような残酷な自虐行為に共感を示し、その悲惨な死に顔を背けるような態度をとら

¹³ 以上、高島元洋「近代武士における死と時間の意識」(『講座日本思想4・時間』東大出版会、所収)を参考にした。

なかったのであろうか。

言うまでもなく、悲惨かつ哀れな死に方が人々を感動させたのは、まったく理解できないことでもない。しかし人々が切腹死に感動させられたのはその死にざまを見る人々の態度が感情的であったということを示しているのではないかと思う。それは感情的な態度を示していると同時に、切腹死が文学作品の上では美化され、称賛されていることをも説明している。すなわち文学作品の中では切腹の美化を通して、死の美学とも言うべきものが存在しているのである。

実は死の美学というものは、以上あげた中世の軍記物語に限らず、近世の武士道のものになると、死の美学がよりいっそう明らかに見られるようになっていく。たとえば「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」と説く『葉隠』がそのもっとも典型的な例と言えよう。そして一九一二年に明治天皇に殉死した乃木希典、一九七〇年に自衛隊で切腹をした三島由紀夫など、その死に追い込まれたいきさつは異なるものの、死の美学を追求しながら、世間に何かを訴えようとして死を遂げたといったところは共通している。彼らのこのような行為は書物の記載やマスコミの紹介を通じて、現代日本人の死生観の形成にある程度の影響を与えているものにちがいない。また日本の文化に浸透した切腹の美学についても、再び人々の関心を喚起させ、現代の日本社会で話題を呼ぶようになっているようである。

参考文献

- 相良 亨 (一九九三年)『相良亨著作集 3 武士の倫理』。日本：ペリカン社。
- 相良 亨 (一九七七年)「武士と死」・『日本における生と死の思想』。日本：有斐閣
- 下村 效 (一九九三年)『武士』。日本：東京堂。
- 高島元洋 (一九八四年)「近世武士における死と時間の意義」・「講座日本思想 4」。
日本：東京大学出版会。
- 千葉徳爾 (一九九四年)『日本人はなぜ切腹するのか』。日本：東京堂。
- 千葉徳爾 (一九九一年)『たたかひの原像』。日本：平凡社。
- 辻善之助英 (一九六〇年)『日本文化史 7 江戸時代』。日本：春秋社。
- 中康弘通 (一九七八年)「切腹の沿革」・『自殺と文化』。日本：至文堂。
- 奈良本辰也 (一九七〇年)『武士道の系譜』。日本：中央公論社。
- 新渡戸稲造 (一九七四年)『武士道』。日本：岩波文庫。
- モーリス・パンゲ著・竹内信夫訳 (一九八六年)『自死の日本史』。日本：筑摩書房。
- 松村 剛 (一九七五年)『死の日本文学史』。日本：中央公論社。

引用文は以下にあげる本文によるが、適宜表記を改めたところがある。

『保元物語』からの引用は新日本古典文学大系『保元物語』(岩波書店)による。

『平家物語』からの引用は新日本古典文学大系『平家物語上・下』(岩波書店)による。

『義経記』からの引用は日本古典文学全集『義経記』(小学館)による。

『太平記』からの引用は新潮日本古典集成『太平記』(新潮社)による。

『播磨風土記』からの引用は日本古典文学大系『風土記』（岩波書店）による。

『続日本記』からの引用は新日本古典文学大系『続日本記』（岩波書店）による。

『万葉集』からの引用は『新訓万葉集下巻』（岩波書店）による。

The Aesthetics of *Seppuku*

Hsu HSiang-Sheng

Department of Japanese, National Chengchi University

Received : Jan.28 2000, Accepted : May 11 2000

Abstract

The study of Japanese culture should not be confined to introducing such arts and crafts as *kabuki*, *ukiyoe*, *sumo*, tea ceremony, and flower arrangement. It should also explore in depth Japanese morality, ideology, and religion. Japan has, since ancient times, developed special manifestations of death including *seppuku* (belly cutting), martyrdom, and the so-called *shinju* (love suicide). Although these special ways of dying do not occur very often in modern Japan, they still play an extremely important role in literature, theater, and the arts, essential to the exploration of the Japanese soul. Why do the Japanese want to *seppuku*? Why does it hold a peculiar fascination for the Japanese? This article begins by tracing the origin of belly cutting, and proceeds to examine the significance of *seppuku* and the aesthetics of death as expressed in such representative medieval military literature as *Hougen Monogatari* (The Tale of Hougen), *Heike Monogatari* (The Tale of the Heike), *Gikeiki*, and *Taiheiki*. It is hoped that through this study we can gain a better understanding of the Japanese view of life and death, and ultimately of Japanese culture in general.

Key Words : 1.*Seppuku* (belly cutting) ; 2.*Hougen Monogatari* ; 3.*Heike Monogatari* ; 4.*Gikeiki* ;
5.*Taiheiki*